

「フランスで出産なんておしゃれだね」

「どんな食事が出るんだろう。写真送ってね」

私は、トレーの上のガッチガチに固いフランスパンと、薄い色のコーヒーを見ながら、親友からのあの時のメールを思い出していた。

私が出産したのは、家から一番近いパリの公立病院だった。今思い返しても、初めての出産を、評判が良いあの病院で迎えることができてよかったと心から思っている。

唯一、産前に想像していなかったことといえば、病院で出される食事だった。

出産後初の朝食の時、

「朝食は何が良いですか」

と聞かれた時に、栄養たっぷりの健康的な朝食を頭に思い描いた、自分の想像力の豊かさに恥ずかしくなった。ただ、コーヒーか紅茶を選択するってことを知っていたら、何も期待はしなかったのに。

それより、ママにカフェインってダメじゃないの？ 私の頭の中は一気に混乱した。

手を触ってみた。あたたかい。

足の指をみてみた。とっても小さい。

あくびをしたり、手や足を動かしながら、赤ちゃんは不思議そうにこつちをみている。

今にも壊れそうな、この小さくて大きな存在を全力で守り抜かないと。

私は急に、責任感で胸が押しつぶされそうになった。

全身が痛い。寝不足で力が出ない。母乳育児がづらい。産後の心身の状態は最悪だった。とにかく早く退院したいって思った数時間後、担当医から赤ちゃんの入院期間延長が告げられた。私は医者の前で、新生児にも負けないくらいの泣きっぷりを披露した。

一日目… アスパラの肉巻き、きんぴら人参、だし巻き卵

二日目… 海老フライ、ひじきの煮物、ブロッコリーの和え物

三日目… 生姜焼き、大学芋、ズッキーニのグリル、卵焼き

四日目… きこの天ぷら、ナスの味噌炒め、海老とインゲンのサラダ

どん底の状態の私を救ってくれたのは、いつもと変わらないあの味だった。

産後の手伝いのために、フランスに来てくれていた母は、夫から私の様子を聞いて、きつと不安だったに違いない。だけど、

「ナスがこんなに大きいのよ」

「ピーマンは、赤ちゃんの顔の大きさぐらいあったわ」

「この梅干し、私が作ったのよ」

といつものように明るく、お弁当を届けてくれた。

「マルシェで椎茸を見つけたの。SHITAKEって、ローマ字で書いてあったの。フランスのキノコに囲まれながらも、堂々とその存在を主張している姿に感動しちゃったわ」

と、いつもとは勝手が違う状況に困るどころか、むしろその違いを楽しんでいた。

退院の日がやってきた。ずっと待ち焦がれていたのに、いざ、赤ちゃんと一緒にタクシーに乗ると、これからの生活が不安で、胸がぎゅゅと苦しくなった。

「おかえりー」

アパルトマンのドアをあけると、いつもと変わらないあの声がする。母の声は、空高く飛ぶボールのように弾んでいた。

寝ている赤ちゃんを優しく見つめながら、母は私に、

「ねえ、お弁当箱あけてみて」

と、嬉しそうに言う。

退院日…お赤飯、からあげ、ほうれん草の胡麻和え、ポテトサラダ

遠足、運動会、ピクニック、振り返ると、母のお弁当は、いつも私の人生に寄り添ってくれていた。蓋を開けた時の、心が安らぐ感覚は、何歳になっても変わらない。

「もち米は日本から持ってきたのよ。お腹すいたでしょ。お茶いれてくるね」

と言いながら、キッチンに向かう母の背中私に、横でスヤスヤ眠る我が子の前では、母のような大きな存在でいたい、と思わせるものだった。

小さい時は、どんな時でも親がいれば、怖いものはないって思っていた。

そして今、私も親になって、今度は親の気持ちがかかるようになった。自分以外の誰かのことで、こんなにも心が揺さぶられ、行動に移せるって、そんな感情、初めて知った。

生きていると、悲しみに涙が溢れることもあるし、心が折れそうなこともある。だけど子どもの前では、どんな時でも、ちょっとやそつとのことでは動じない、力強い木のように堂々としていたい。

「いただきます」

一粒、一粒輝いているあずきと、ふっくらとしたもち米を、私はゆっくりと噛み締めた。